【論文】

『太平広記』訳注（稿）
―― 巻四百　「宝」部金上（中）――

高　西　成　介

（2013年9月30日受付、2013年12月18日受理）

Translation with notes of *Taiping guangji* 太平廣記,
vol. 400 , Bao-bu 寶部, Jin 金, shang 上, (part 2)

TAKANISHI Seisuke

(Received : September 30 , 2013 Accepted : December 18 , 2013)

要　旨

北宋初期に編纂された『太平広記』五百巻は、中国の小説研究や文化研究において大変重要な資料である。本稿は前稿に引き続き『太平広記』巻四百宝部上に訳注を加えたものである。

Abstract

Taiping guangji 太平廣記, containing 500 volumes, was compiled during the early Northern Song Dynasty. These volumes are very important for the study of Chinese tales, and cultures, etc.

This paper is a translation with notes of *Taiping guangji* 太平廣記, vol. 400 , Bao-bu 寶部, Jin 金, shang 上, (part 2)

キーワード
太平広記・「宝」部・訳注

Key words :
Taiping guangji, Bao-bu, translation with notes

所属・学位
本学文化学部准教授　修士（文学）

Academic Appointment & Degree :
Associate Professor , Depatment of Cultural Studies , University of Kochi (Master of Literature)

本稿は、前稿「『太平広記』訳注（稿）——巻四百「宝」部金上（上）——」（『高知県立大学紀要』文化学部編第六一巻、二〇一二年）に続き、『太平広記』巻四百「宝」部に訳注を施したものである。

底本、参考文献等は前稿に記した通りであるが、本稿ではさらに次の文献を参照した。

○張国風会校『太平広記会校』北京燕山出版社　二〇一一年

○程毅中・張守儼点校『隋唐嘉話・朝野僉載』中華書局歴代史料筆記叢刊　一九七九年

○李時人編校『全唐五代小説』陝西人民出版社　一九九八年

本稿で新たに参照した『太平広記会校』は、『太平広記』の多くの版本を参照し本文を整理した上、校記を付した大変な労作である。ただ、すべての文字の異同が記されているわけでは無く、また文字の選択や断句に疑問の残る箇所が散見される。今後この『会校』本が、従来の汪紹楹点校本（中華書局）に代わって定本として用いられていくことになると考えられるが、汪紹楹点校本も引き続き重要な価値を持ち続けるであろう。そこで本稿では、底本は変更せず、引き続き汪紹楹点校本を用いることとした。

なお、作品番号は前稿の続きとする。

10「玄金」

太宗時、汾州言、「青龍白虎吐物在空中、有光如火、墜地隱入二尺、掘之、得玄金、廣尺餘、高七尺。」（出『酉陽雜俎』）

【書き下し文】

太宗の時、汾州言ふ、「青龍白虎 物を吐き空中に在り、光有り火の如く、地に墜ちて隠れ入ること二尺、之を掘りて、玄金を得たり、広さ尺余、高さ七尺なり」と。（出『酉陽雜俎』）

【語釈】

○**太宗時**　太宗は、唐の第二代皇帝。李世民。在位六二六～六四九。太宗は廟号。『旧唐書』巻二・巻三、『新唐書』巻二に伝がある。　○**汾州**　州名。治所は隰城県（現在の山西省汾陽県）　○**玄金**　玄は黒色をあらわす。玄金は鉄、なかでもここでは隕鉄を指していると思われる。『淮南子』墜形訓に、「玄天六百歳生玄砥、玄砥六百歳生玄湏、玄湏六百歳生玄金、玄金千歳生玄龍、玄龍入藏生玄泉。玄泉之埃上爲玄雲、陰陽相薄爲雷、激揚為電、上者就下、流水就通、而合于玄海（玄天 六百歳にして玄砥を生じ、玄砥 六百歳にして玄湏を生じ、玄湏 六百歳にして玄金を生じ、玄金 千歳にして玄龍を生じ、玄龍 蔵に入りて玄泉を生ず」とある。

【訳文】

唐の太宗の治世の時、汾州から次のような奏上があった、「青龍と白虎が空中で物を吐き出し、火のような光を発して地面に落ち二尺の深さまで埋まり、これを掘り出したところ玄金を得たのですが、それは広さ一尺ほど、高さは七尺でありました」と。

【補説】

〈太宗と金〉 太宗は、本巻09「成弼」にもその名が見える。また、本話と同様の話が、『新唐書』巻三六・五行志三や、『旧唐書』巻三七・五行志に見える。『新唐書』五行志の記述によれば、このことが起こったのは貞観八（六三四）年のことであった。

11「鄒駱駝」

鄒駱駝、長安人。先貧、嘗以小車推蒸餅賣之。毎勝業坊角有伏磚、車觸之即翻、塵土涴其餅、駝苦之。乃將钁斸去十餘磚、下有瓷甕、容五斛許。開看、有金數斗、於是巨富。其子昉、與蕭佺交厚。（交厚原作附馬、據明鈔本改）時人語曰、「蕭佺駙馬子、鄒昉駱駝兒。非關道德合、只爲錢相知。」（出『朝野僉載』）

【書き下し文】

鄒駱駝は、長安の人なり。先 貧しく、嘗て小車 推し、蒸餅 之れを売るを以てす。勝業坊の角毎に伏磚有り、車 之に触れて即ち翻り、塵土 其の餅を涴し、駝 之に苦しむ。乃ち钁を将て十余磚を斸去するに、下に瓷甕有り、容は五斛許りなり。開き看るに、金数斗有り、是に於いて巨富たり。其の子昉、蕭佺と交はり厚し。時人語りて曰く、「蕭佺は附馬の子、鄒昉は駱駝の児なり。道徳の合するに関はるに非ず、只だ銭の為に相ひ知るのみ」と。

【語釈】

○鄒駱駝　未詳。「駱駝」という名から、西域出身であった可能性も考えられる。　**○勝業坊**　東市のすぐ北にあった坊。「坊」とは、長安城内において土とレンガで築いた壁（牆壁）に囲まれた行政区画の単位。　**○伏磚**　地面に敷かれた瓦。「磚」は粘土を乾燥させて焼いて作った建築資材をいう。　**○钁**　くわ。農具の一種。　**○斸去**　掘り出すことをいう。『朝野僉載』は、「斸去」に作る。　**○斛**　容量の単位。一斛は十斗、百升、約六十リットルである。　**○蕭佺**　未詳。　**○駙馬**　底本「附馬」に作る。会校本及び『朝野僉載』に拠って改めた。「駙馬」は官名。駙馬都尉の簡称。皇帝に近侍し護衛する兵団の長官。皇帝の娘婿がこの任に当たることが多かった。

【現代語訳】

騶駱駝は長安の人である。先祖は貧しく、かつては小さい車をひいて蒸し餅を売って歩いていた。勝業坊の角ごとに瓦が敷き詰められていたが、車がこれにあたってひっくり返り、塵や土で餅が汚れてしまうことがあり、駱駝は頭を抱えていた。そこで鍬で十あまりのれんがを掘り出した。すると（れんがの）下にはかめがあり、容量は五斛ほどであった。開けてみたところ、金数斗が入っており、こうして巨万の富を手に入れた。その子昉は、蕭佺と親しくつきあっていた。当時の人々は、「蕭佺は、駙馬の子、騶昉は駱駝の子だ。道徳があってつきあっているのではない、ただ金のために互いにつきあっているのだ」と評した。

【補説】

〈地中から富を獲得する話〉 本話は、貧しい蒸し餅売りが、地面から金を掘り起こして巨万の富を手に入れるという典型的な致富譚であり、騶家の富の由来が語られる。こうした話が語られる背景には、唐代における商業経済の発展があろう。拙稿「唐代小説に見られる致富譚について」（『中國中世文學研究』四五・四六合併号所収、二〇〇四年）参照。

また、末尾の附された当時の人々の言葉からは、成り上がり者である騶

家の息子と名家蕭家との関係を、「駱駝」と「馬」という語を用いて揶揄した、新興商人への冷ややかな視線が読み取れよう。

12「裴談」

裴談爲懐州刺史。有樵者入太行山、見山穴開、有黄金焉、可數間屋。樵者喜、入穴取金、得五鋌、皆長尺餘。因以石窒穴、且志之。又數日往、則迷其處。樵者頗諳山谷、即於洛城懐州、造開石物鎚鑿數車。州有崔司戸、知而助之。將往開、而談妻有疾。請道家奏章請命。奏章道士忽傳天帝詔曰、「帝詔語裴談。吾太行山天藏開、比有樵夫見之。吾已遺金五鋌、命其閉塞。而愚人貪得、重求不獲。乃興惡、將開吾藏、已造鎚鑿數車。若開不休、或中吾伏藏。此若開鎚鑿、此州人且死盡、深無所益。此州崔司戸、與其同心。但詣崔驗之、自當有見。急止之、汝妻疾自當瘳矣。」談大異之、即召崔子問故、果符所言。乃沒其開石具而禁止之。妻尋有閒。（出『紀聞』）

【書き下し文】

裴談　懐州刺史為り。樵者有り太行山に入り、山穴の開くを見るに、黄金有り、数間ばかりの屋たり。樵者喜び、穴に入りて金を取り、五鋌を得たり、皆な長さ尺余なり。因りて石を以て穴を窒ぎ、且つ之に志す。又た数日にして往けば、則ち其の処を迷ふ。樵者　頗る山谷を諳んじ、即ち洛城懐州に於いて、石物を開く鎚鑿数車を造る。州に崔司戸有り、知りて之を助く。将に往きて開かんとするに、談の妻　疾有り。道家に請ひて章を奏し命を請ふ。章を奏する道士忽ち天帝の詔を伝へて曰はく、「帝詔して裴談に語らん。吾が太行山の天蔵開かれ、比樵夫の之を見る有り。吾已に金五鋌を遺り、其の閉塞を命ず。而れども愚人　貪り得んとして、重ねて求むるも獲ず。乃ち悪を興し、将に吾が蔵を開かんとし、已に鎚鑿数車を造る。若し開くこと休めざれば、或いは吾が伏蔵に中つ。此れ若し開くに鎚鑿せば、此の州の人　且に死して尽き、深く益する所無からんとす。此の州の崔司戸、其れと心を同じうす、但だ崔に詣り之を験すれば、自ら当に見る有るべし。急ぎ之を止むれば、汝が妻の疾　自ら当に瘳ゆべし」と。談大いに之を異とし、即ち崔の子を召して故を問ふに、果たして言ふ所と符す。乃ち其の石を開く具を没し之を禁止す。妻尋いで間ゆ有り。

【語釈】

○**懐州**　州名。治所は河内県（現在の河南省焦作市沁陽一帯）。　○**太行山**　五行山、太形山ともいう。現在の山西省、河南省、河北省の三省の境界に位置する山脈。本話の舞台である懐州河内にも、山脈は広がっていた。『新唐書』巻三十九地理志三「懐州河内郡」の項に、「河内、有太行山」とある。太行山をめぐっては、王烈という仙人が若い頃に太行山に行った時に、山が崩れ石が数百丈にわたって破裂し、石の中に穴が一つ開いていて、その中から髄のような青い泥が流れ出ていたという話などもある。（『神仙伝』巻六王烈）　○**鋌**　金を精錬して粒状や延べ板状になったものをいう。　○**洛城**　洛陽（現在の河南省洛陽市）のこと。　○**鎚鑿数車**　「鎚鑿」は、つちとのみ。「車」は量詞。『儀礼』聘礼に、「門外米禾皆二十車、薪芻倍禾（門外の米禾　皆な二十車、薪芻　禾に倍す）」とある。穴をふさいだ石を開ける道具である槌と鑿を、車数台分作ったということか。　○**司戸**　官名。司戸参軍。人口、戸籍簿、結婚、田地、宅地、賦役、道路などを掌った。『通典』巻三三職官十五に、「司戸参軍、……（中略）……大唐掌戸口、籍帳、婚嫁、田宅、雑徭、道路之事（司戸参軍、……（中略）……大唐　戸口、籍帳、婚嫁、田宅、雑徭、道路の事を掌る）」とある。　○**貪得**　財物をむさぼり求めること。　○**伏蔵**　ひそかに隠すこと。『墨子』雑守に、「諸詛阜、山林、溝瀆、丘陵、阡陌、郭門、若閭術可要塞、及為

微職、可以迹知往来者少多、及所伏蔵之処（諸々の詎阜、山林、溝瀆、丘陵、阡陌、郭門、若しくは閻術は要塞すべく、及び微職を為り、以て往来する者の少多、及び伏蔵する所の処を迹知すべし）」とある。　**○此若開鎚鑿**　この五字、意味がよくわからない。いまとりあえず、「此れ若し開くに鎚鑿せば」と訓読した。会校本は野竹齋鈔本に拠って「必重罹譴責（必ず重だ譴責に罹り）」と字を改めている。これならば、「必ず大変な咎めを受け」の意となる。　**○符**　ぴったり合うこと。　**○間**　病気が治る。『論語』子罕に「子疾病。子路使門人為臣、病間曰……（子の疾 病なり。子路 門人をして臣たらしむ。病、間えて曰はく……）」とあり、何晏集解に引く孔安国の注に「少差曰間（少しく差えたるを間と曰ふ）」とある。また、『宣室志』「李重」（『太平広記』巻三五一「鬼」部）に、「君之疾当間矣（君の疾 当に間ゆべし）」とみえる。

【現代語訳】

裴談が懐州刺史であったとき、木こりがいたが太行山に入り、山に穴が開いているのを見つけたが、そこには黄金があり、数間ばかりの部屋に積まれていた。木こりは喜んで穴の中に入って黄金を手にし、五本の金の延べ板（五挺の金）を手に入れたが、どれも長さが一尺ほどであった。そこで石で穴をふさいで、あわせてその場所に印を付けた。また数日して行ってみると、場所がどこかわからなくなっていた。木こりは山谷をたいへんよく知っており、すぐに洛城懐州で石を開ける槌と鑿を車数台分作った。州に崔司戸という人物がいたが、彼はこのことを知って木こりを手伝った。ちょうどその場所に行って開けようとしてたそのときに、裴談の妻が病気になった。道士に頼んで天帝に文書を奏上し、その命が助かることを願った。文書を奏上した道士が突然天帝の詔を伝えて言った、「天帝が命じられ私が裴談に申し上げます。わが太行山の宝物庫が開かれ、近ごろ木こりがこれを見つけた。私はすでに五本の金の延べ板を彼に与え、その場所を閉じ塞ぐことを命じた。しかし愚か者は財宝を貪欲に求め、再びそれを手に入れることを求めたが手に入れることができなかった。そこで邪な心を起こし、私の蔵を開けようとして、槌とのみ数車を作った。もし開けることを止めなければ、ことによると私の隠し蔵が見つかってしまうかもしれぬ。もし槌と鑿で暴いたならば、この州の人はみな死に絶えて、まったく何の益する所もないだろう。この州の崔司戸は、木こりと心を一つにしている。ただ崔のもとに行ってこのことを確かめてみるだけで、自然とわかるはずだ。急ぎこのことを阻止すれば、お前の妻の病気は自然と治るはずだ。」と。裴談はたいそうこれを不思議なことであるとして、崔の子どもを召して理由を問うたところ、はたして天帝の言った言葉とぴったりと一致したのである。そこでその石を開く道具を没収しこれを使うのを禁止した。妻はまもなく病が癒えた。

【補説】

〈黄金獲得譚〉本話は、山中の穴から天帝の黄金を手に入れる話である。本話の類話としては、少し時代が下るが、『稽神録』「桂従義」（『太平広記』巻三七四「霊異」部）がある。次のような話である。

池陽建徳縣吏桂従義家人入山伐薪。常所行山路、忽有一石崩倒。就視之、有一室、室有金漆柏牀六張、茭薦芒簟皆新、金翠積疊。其人坐牀上良久、因揭簟下、見一角柄小刀、取内懐中而出。扶起崩石塞之、以物爲記、歸呼家人共取。及至、則石壁如故、了無所見。（池陽建徳県吏桂従義の家人 山に入りて薪を伐る。常に行く所の山路に、忽ち一石の崩れ倒るる有り。就きて之を視るに、一室有り、室に金漆の柏牀六張有り、茭薦芒簟皆な新にして、金翠 積み畳ぬ。其の人 牀上に坐すること良に久しうして、因って簟下を揭ぐるに、一角柄の小刀を見、

取りて懐中に内めて出づ。崩石を扶け起こして之を塞ぎ、物を以て記と為し、帰りて家人を呼びて共に取らんとす。至るに及びて、則ち石壁 故の如く、了に見る所無し。）

こうした山中の穴に宝物が存するという話は、宋代以降の小説や筆記においてしばしば語られる。

また本話は、いわゆる「金牛説話」とも関連すると考えられる。「金牛説話」に関しては、前稿「雩都縣人」の補説参照。また、『紀聞』には、次のような話も見える。

唐先天中、有田父牧牛嵩山、而失其牛。求之不得、忽見山穴開。中有錢焉、不知其數。田父入穴、負十千而歸。到家又往取之、迷不知道。逢一人謂曰、「汝所失牛、其直幾耶。」田父曰、「十千。」人曰、「汝牛爲山神所將、已付汝牛價、何爲妄尋。」言畢、不知所在。田父乃悟、遂歸焉。（唐の先天中、田父有り牛を嵩山に牧ふも、其の牛を失ふ。之を求むるも得ざるに、忽ち山穴の開くを見る。中に銭有り、其の数を知らず。田父 穴に入り、十千を負ひて帰る。家に到りて又た往きて之を取らんとするに、迷ひて道知らず。一人に逢ふに謂ひて曰はく、「汝の失ふ所の牛は、其の直幾ばくぞ」と。田父曰はく、「十千なり」と。人曰はく、「汝の牛 山神の将ふ所と為る、已に汝に牛価を付す、何為れぞ妄りに尋ぬ」と。言ひ畢はりて、在る所を知らず。田父乃ち悟り、遂に帰る。）（『太平広記』巻四三四「畜獣」部）

この話でも、山中の穴より銭を獲得することが語られるが、その背後に山神と牛との関係がうかがえて興味深い。

13「牛氏僮」

牛肅曾祖大父、皆葬河内、出家童二戸守之。開元二十八年、家僮以男小安、質於裴氏。齒牙爲疾、晝臥廏中。若有告之者曰、「小安、汝何不起。但取仙人杖根煮湯含之、可以愈疾。何忍焉。」小安驚顧、不見人而又寢。未久、告之如初。安曰、「此豈神告我乎。」乃行求仙人杖。得大叢、掘其根、根轉壯大。入地三尺、忽得大磚有銘焉。揭磚已下、有銅鉢斗、於其中盡黃金鋌、丹砂雜（雜字原空闕、據明鈔本補）其中。安不知書、既藏金、則以磚銘示村人楊之侃。留銘示人、而不告之。銘曰、「磚下黃金五百兩、至開元二十八年五月十八日、有下賊胡人年二十二、姓史者得之。澤州城北二十五里、白浮圖之南、亦二十五里、有金五百兩、亦此人得之。」

諸人既見銘、道路諠聞於裴氏子。問小安、且諱、執鞭之、終不言。於是拷訊、萬端不對、拘而閉諸室。會有畫工來訪小安、市丹砂焉。裴氏子誘問之、畫工具言其得金所以。又曰、「吾昨於人處、用錢一百、市砂一斤、砂既精好、故來更市。」張氏益信得金、召小安、以畫工示之。安曰、「掘得銘後、下得數金丹砂、今無遺矣。」金寶不得、則又加箠笞治之、卒不言。夜中亡去。

會裴氏蒼頭、自太原赴河内、遇小安於澤州。小安邀至市、酒飲酣招去。意者小安便取澤之金乎。及蒼頭至裴言之、方悟。（出『紀録』明鈔本作出『紀聞』）

【書き下し文】

牛肅の曾祖、大父、皆な河内に葬られ、家僮二戸を出して之を守らしむ。開元二十八年、家僮 男小安を以て、裴氏に質す。歯牙 疾と為り、昼 廏中に臥す。之に告ぐる者有るが若くして曰はく、「小安、汝 何ぞ起たざる。但だ仙人杖の根を取り湯に煮て之を含めば、以て疾を愈ゆべし。何ぞ忍ばんや」と。小安 驚き顧みるも、人を見ずして又た寢ぬ。未だ久しからずして、之に告ぐること初めの如し。安曰はく、「此れ豈に神の我に告ぐるか」と。乃ち行きて仙人杖を求む。

大叢を得、其の根を掘るに、根 転た壮大なり。地に入ること三尺、忽ち大磚の銘有るを得たり。磚已下を掲ぐるに、銅の鉢斟有り、其の中に尽く黄金の鋌あり、丹砂 其の中に雑ふ。

安 書を知らず、既に金を蔵し、則ち磚の銘を以て村人楊之侃に示す。銘を人に示すに留め、之を告げず。銘に曰はく、「磚下の黄金五百両、開元二十八年五月十八日に至り、下賊の胡人 年二十二、姓は史なる者 之を得ん。沢州の城北二十五里、白浮図の南、亦た二十五里、金五百両有り、亦た此の人 之を得ん」と。

諸人既に銘を見、道路 諠しく裴氏の子に聞こゆ。小安に問ふも、且つ諱み、執らへて之を鞭うつも終に言はず。是に於いて拷訊するも、万端対へず、拘へて諸を室に閉ざす。会々画工有り来たりて小安を訪ね、丹砂を市ふ。裴氏の子 誘ひて之に問ふに、画工 具に其の金を得し所以を言ふ。又た曰はく、「吾れ 昨 人処に於いて、銭一百を用て、砂一斤を市ふ、砂は既に精好なり、故に来たりて更に市はんとす。」と。張氏益々金を得るを信じ、小安を召して、画工を以て之に示す。安曰はく、「掘りて銘を得し後、下に数金・丹砂を得たり、今 遺る無し」と。金宝得ざれば、則ち又た箠笞を加へて之を治むるも、卒に言はず。夜中に亡げ去る。

会々裴氏の蒼頭、太原より河内に赴き、小安に沢州に遇ふ。小安 邀へて市に至り、酒飲み 酣にして招去す。意者ふに小安便ち沢の金を取るか。蒼頭の裴に至り之を言ふに及び、方に悟る。出『紀録』明鈔本作出『紀聞』

【語釈】

○**牛肅**　唐代に編纂された小説集『紀聞』の撰者。『唐書』には伝が無く、詳しい事跡はわからないが、武周年間（六八四～七〇五）頃に生まれ、肅宗乾元元（七五八）年頃にはまだ在世であったと思われる。（李剣国『唐代志怪伝奇叙録』南開大学出版社、一九九三年）また、『元和姓纂』巻五によれば、牛肅は涇陽（現在の陝西省咸陽市涇陽県）の人で、官位は岳州刺史であったという。ただ、李剣国氏は前掲書において、『紀聞』「懐州民」（『太平広記』巻三六二「妖怪」部）の「開元二十八年春二月……牛肅時在懐、親遇之」という記述などから、牛肅は懐州河内の人で、京兆涇陽は祖籍であろうとされる。　○**河内**　地名。懐州のこと。今の河南省焦作市沁陽付近。　○**家僮**　召使い。　○**質**　約束や借金などの保証として人を預ける。　○**仙人杖草**　『本草綱目』巻二十七菜部柔滑類に「仙人杖草」があり、その集解に「蔵器曰、仙人杖生剣南平沢。葉似苦苣、叢生（蔵器曰はく、仙人杖 剣南の平沢に生ず。葉は苦苣に似、叢生す）。」とある。　○**磚**　瓦。11「騶駱駝」語釈参照。　○**銅鉢斟**　銅でできた鉢と升。斟は斗に同じ。　○**丹砂**　硫化水銀の結晶で、水銀と硫黄の天然化合物。深い朱色をしており、重くてやわらかい。仙薬として最上のものであった。09「成弼」語釈参照。　○**楊之侃**　未詳。　○**沢州**　州名。治所は晋城県。現在の山西省晋城市一帯。　○**下賊**　下賤な盗人。会校本は「下賤」に作る。　○**浮図**　仏塔。　○**諱**　隠す。時代は下るが、『北夢瑣言』「僧彦先」（『太平広記』巻三百八十五「再生」部）に、「青城宝園山僧彦先、嘗有隠慝、離山往蜀州、宿於中路天王院。暴卒、被人追摂、詣一官曹。未領見王、先見判官、詰其所犯。彦先抵諱之。判官乃取一猪脚与彦先、彦先推辞不及、僶俛受之（青城宝園山の僧彦先、嘗て隠慝有り、山を山れて蜀州に往き、中路 天王院に宿す。暴かに卒し、人に追摂せられ、一官曹に詣る。未だ王に見ゆるを領せず、先に判官に見ゆるに、其の犯す所を詰らる。彦先抵みて之を諱む。判官乃ち一猪脚を取り彦先に与ふるに、彦先推辞し及ばざるも、僶俛にして之を受く）」とある。　○**拷訊**　拷問する。　○**閉**　閉じ込める。『後漢書』巻二十三「竇憲伝」に、「後事発覚、太后怒、閉憲於内宮（後に事 発覚し、太后怒って憲を内宮に閉ざす）」とある。　○**張氏**　「裴氏」の誤りか。参照した各種『太平広記』はすべて「張氏」に作

る。『全唐五代小説』では、「『裴』、底本作『張』、依上下文径改」とする。いまとりあえず、「裴氏」として解釈した。　**○金寶不得**　「寶」字、会校本は「實」に作る。また、会校本ではこの四字までを小安の語とする。いま会校本には従わず、この四字を下に繋げて解釈した。　**○箠笞**　鞭打ち。　**○治**　取り調べる。『史記』巻八十七「李斯列伝」に、「趙高治斯、榜掠千餘。不勝痛、自誣服（趙高 斯を治め、榜掠すること千余。痛みに勝へず、自ら誣服す）」とある。　**○蒼頭**　召使い。　**○太原**　太原府。河東節度使の治める地で、治所は太原（現在の山西省太原市）。

【現代語訳】

牛粛の曽祖父、祖父はみな河内地方に埋葬されていて、二家の召使いを遣わして墓守をさせていた。開元二十八（七四〇）年、召使いは息子小安を裴氏に借金のかたとして預けた。あるとき小安は歯を病んで、昼間からうまやで寝込んでいた。するとまるでそこに人がいて話しかけるかのように、「小安よ、おまえはどうして起き上がらないのか。仙人杖の根を取ってお湯で煮てこれを口に含めば、病を治すことができよう。どうして我慢するのか」と声がした。小安は驚いて振り返ってみたが、だれもそこにはいなかったのでまた寝た。いくばくもしないうちに、先ほどと同じように告げられた。安は言った、「これは神さまが私に告げているのだろうか」と。そこで出かけて行って仙人杖を探し求めた。

すると仙人杖が群がり生えているのを見つけ、その根を掘り出したところ、根はますます大きくなった。地面から三尺ほど掘ったところで、突然文字が書き付けられた大きな磚を手に入れた。磚の下を持ちあげてみると銅でできた鉢と升があり、その中はすべて金の延べ板で、丹砂がその中に混じっていた。

安は文字を読めなかったので、そのまま金を隠し、磚に書かれた銘文を村人の楊之侃に見せた。ただ銘を人に示すだけにして、手に入れた場所は告げなかった。銘には、「瓦の下の黄金は五百両、開元二十八年五月十八日に、下賤な胡人の盗人で、年が二十二、姓は史という輩がこれを手に入れるだろう。沢州の城北二十五里、白い仏塔の南また二十五里のところに、金五百両があり、またこの者が手に入れるだろう」とあった。

人びとが銘文を見て、道路で騒がしく話をしているのが、裴氏の息子に伝わった。小安に問うも、依然として隠して話さず、彼を捕まえてむち打っても、最後まで言わなかった。ここにおいて拷問するも、どうやっても答えないので、捕まえて彼を部屋に閉じこめた。たまたま小安を訪ねてやって来て、丹砂を彼から買った画工がいた。裴氏の息子が画工を誘い出して聞いてみると、画工は（小安が）その金を得た理由をつぶさに語った。また言うには、「私は昨日ある人のところで、銭一百で丹砂一斤を買ったのですが、その丹砂がたいへん良いものでして、ですからこちらに来てさらに買おうとしたのです。」裴氏はますます小安が金を手に入れたことを信じ、小安を呼んで来させて画工を彼に突きつけた。小安は言った、「掘って銘（の入った磚）を得た後、その下から数金と丹砂を手に入れましたが、今は残っているものはありません」と。裴氏は金の宝を手に入れられなかったので、さらに鞭打ちを加えて彼を取り調べたが、結局場所は言わなかった。そして夜中になって逃げ去った。

たまたま裴氏の下男が、太原から沢州に行ったときに小安と沢州で会った。小安は彼を迎えて市場に行き、酒を飲み宴たけなわになってどこかに呼ばれて行ってしまった。おもうにおそらく小安は沢州の金を手に入れたのであろう。下男が裴のもとに戻りこのことを語るに及んで、はじめて事の次第を理解したのである。

14「宇文進」

【本文】

夏縣令宇文泰猶子進、嘗於田閒得一崑崙子、洗拭之、乃黃金也。因寶持之。數載後、財貨充溢、家族蕃昌。後一夕失之、而産業耗敗矣。（出『紀聞』）

【書き下し文】

夏県令 宇文泰の猶子 進、嘗て田間に一崑崙子を得、之を洗ひ拭へば、乃ち黄金なり。因って宝とし之を持つ。数載の後、財貨充ち溢れ、家族 蕃昌す。後一夕 之を失ふに、産業 耗り敗る。出『紀聞』

【語釈】

○夏県　絳州夏県。現在の山西省運城市夏県。　**○宇文泰**　未詳。　**○猶子**　兄弟の子。おいを指す。　**○崑崙子**　南海の黒人を指す語。その肉体的特徴について、例えば『旧唐書』巻一百九十七「南蛮伝」には「自林邑以南、皆捲髪黒身、通号為『崑崙』（林邑より以南、皆は捲髪黒身、通号『崑崙』と為す」とある。掘り出したものが汚れて真っ黒であったことから、このような表現になったのであろう。『高僧伝』巻五釈道安に、「須待後次、当難殺崑崙子（後次を須待ちて、当に崑崙子を難り殺すべし）」とある。　**○蕃昌**　繁盛する、栄える。　**○産業**　田畑や家屋などの個人の財産を指す。『異苑』103に、「新野蘇卷与婦佃於野舍、每至飲時、輒有一物来、其状似蛇、長七尺五寸、色甚光采、卷異而餉之。遂経数載、産業加厚（新野の蘇卷 婦と野舎に佃つくるに、飲時に至る毎に、輒ち一物の来たる有り、其の状は蛇に似、長さは七尺五寸、色は甚だ光采あり、卷 異として之に餉る。遂に数載を経、産業 厚きを加ふ）」とある。　**○耗敗**　「耗」はすり減る、減少する。「敗」はしぼむこと。ここでは、財産が無くなってしまったことをいう。

【解釈】

夏県令の宇文泰のおいの進は、かつて田で一体の黒人のような人形を手に入れた。洗って拭いてみると、黄金であった。そこで宝として保管した。数年ののち、家には財貨がみちあふれ、家族は大いに栄えた。その後ある日の夜にその人形を失うと、財産は無くなってしまった。

【補説】

〈金人獲得譚〉本話は、宇文家の繁栄と没落を語る致富譚である。記述はきわめて簡潔であるが、いくつか興味深い点がある。まず、宇文進が田で黄金を手に入れるというモチーフは、六朝志怪小説以降しばしば見られるモチーフである。例えば『異苑』35に、次のような話が見える。

義熙中、新野黄舒耕田、得一缸金。卜者云、「三年勿用、長守富也。」舒不能從、遂成土壤。（義熙中、新野の黄舒 田を耕し、一缸金を得たり。卜者云ふ、「三年用ふこと勿くんば、長く富を守るなり」と。舒従ふこと能はず、遂に土壤と成る）

この話では、結局富は獲得してはいないが、田から金を掘り起こすというモチーフは共通している。

さらに、田から拾い上げた金について、「一崑崙子」と記されている。「崑崙子」とは、【語釈】でも触れたが南海地方の黒人を指す語である。こうした人形のものを掘り出すという話型は、唐代に入ると多く見られるようになる。例えば、『河東記』「龔播」（『太平広記』巻四〇一は、出典を『河東集』とする）には、次のような話が見える。

龔播者、峽中雲安監鹽賈也。其初甚窮、以販鬻蔬果自業、結草廬於江邊居之。忽遇風雨之夕、天地陰黑。見江南有炬火、復聞人呼船求濟急。時已夜深、人皆息矣。播即獨棹小艇、渉風而濟之。至則執炬者仆地。

視之卽金人也。長四尺餘。播卽載之以歸。於是遂富。經營販鬻、動獲厚利、不十餘年閒、積財巨萬、竟爲三蜀大賈。（龔播は、峽中雲安の鹽賈を監するものなり。其の初め甚だ窮まり、蔬果を販鬻ぐを以て自ら業とし、草廬を江邊に結びて之に居る。忽ち風雨の夕に遇ひ、天地陰黑し。江南に炬火有るを見、復た人の船を呼びて濟ひを求むること急なるを聞く。時　已に夜深く、人　皆な息む。播　即ち獨り小艇を棹ぎ、風を渉りて之を濟ふ。至れば則ち炬を執る者地に仆る。之を視れば即ち金人なり。長さ四尺餘なり。播は即ち之を載せて以て歸る。是に於て遂に富む。販鬻を經營し、動もすれば厚利を獲、十餘年間ならずして、財巨萬を積み、竟に三蜀の大賈と爲れり。）

筆者はかつて、こうした話を「金人獲得譚」として分類し分析したことがある。（「唐代小説に見られる致富譚について」『中國中世文學研究』四五・四六合併号、二〇〇四年）金人獲得譚は、共同体の外部から異人が訪れ、その人物が金人へと変化するという構造を持つものが多い。本話もまた、金人獲得譚の一つのヴァリエーションであろう。

そもそも崑崙子は、中国の外部から中国にやって来る異能を持った異人であり、しばしば奴隷として使役された。こうした奴隷をまた、「崑崙奴」と呼ぶ。力持ちでまた泳ぎを得意とした彼らは、しばしば水夫・船員として使われたようである。そのことは、宋・朱彧『萍洲可談』巻二に、「広中富人多畜鬼奴。絶有力、可負数百斤。言語嗜慾不通、性淳不逃徒。亦謂之野人。……有一種近海野人、入水眼不眨。謂之崑崙奴（広中の富人多く鬼奴を畜ふ。絶だ力有り、数百斤を負ふ可し。言語嗜慾　通せざるも、性淳にして逃徒せず。亦た之を野人と謂ふ。……一種の近海の野人有り、水に入るも眼　眨かず。之を崑崙奴と謂ふ）」という記述があることからもうかがえる。こうした船はおそらく交易船であり、崑崙奴はまた富とも結びつく存在であった。

ただ、本話は舞台が内陸であり、船を用いた交易とはあまり関係のない地である。しかし、崑崙奴は陸上でもまたその力を発揮したようである。「張老」（『太平広記』巻十六引『続玄怪録』）には、「［韋義方］到天壇南、適遇一崑崙奴、駕黃牛耕田（［韋義方］天壇の南に到り、適たま一崑崙奴の、黄牛を駕して田を耕せるに遇ふ）」とあり、主人である仙人張老の元で、崑崙奴は農耕に従事している。本話が語られた背景には、こうした「崑崙子（崑崙奴）」をめぐるイメージが存在していたのであろう。さらに想像をたくましくすれば、この話の前段には他の「金人獲得譚」と同じ様に「崑崙子」の来訪が語られていたとも考えられるのではないだろうか。

異人である「崑崙子」もまた、共同体の外部から富をもたらすと考えられていた。また、「崑崙子」と同様、当時海外から中国に渡ってきた異人に「胡人」がいる。胡人もまた富や財宝と関わりが深い。本話は「胡人買宝譚」との繋がりも考えられる。わずか五〇字あまりで記される本話は、致富譚を考える上で大変重要な問題を内包した話だといえるのではないだろうか。

なお、唐代の「崑崙奴」に関しては、川口秀樹「唐代小説『崑崙奴伝』考」（『中国学研究論集』第二号、一九九八年）、程国賦「唐代小説的崑崙奴形象」（『唐代小説与中古文化』文津出版、二〇〇〇年）などに詳しい。

（続）

【附記】本稿は、科学技術研究費補助金基盤研究(B)「海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究」（課題番号　23320075）の研究成果の一部である。